

平成 30 年度 第 1 回 新潟市美術館及び新潟市新津美術館協議会 議事録要旨

日 時 平成 30 年 7 月 1 日 (日) 午後 2 時から 4 時

会 場 新潟市美術館 講堂

出席者

(委員) 会 長	中山 輝也	新潟県博物館協議会会長
	今井 悦子	新潟市美術協会参事
	金山 喜昭	法政大学キャリアデザイン学部教授
副会長	佐藤 靖子	新潟大学教育学部附属新潟中学校副校長
	島 敦彦	金沢 21 世紀美術館館長
	建畠 哲	多摩美術大学学長
	田中 咲子	新潟大学教育学部准教授
	東村 里恵子	フリーアナウンサー
	降旗 千賀子	目黒区美術館学芸員
	田宮 佑子	公募委員
	茂木 美智恵	公募委員

(事務局)

	前山 裕司	新潟市美術館館長
	高橋 剛	同 副館長
	松沢 寿重	同 課長補佐 (学芸員)
	高橋 良子	同 総務係長
	荒井 直美	同 学芸係長 (学芸員)
	横山 秀樹	新津美術館館長
	山口 穰	同 副館長
	奥村 真名美	同 学芸員

次 第

- 1 部長挨拶 新潟市文化スポーツ部長 中野 力
- 2 開会挨拶 新潟市美術館館長 前山 裕司
- 3 出席者紹介
- 4 議事
 - (1) 会長及び副会長の選任
 - (2) 新潟市美術館及び新津美術館平成 29 年度事業報告
 - (3) その他
- 5 閉会挨拶 新津美術館館長 横山 秀樹

1 部長挨拶

(中野部長)

委員の改選後、初めての協議会である。新潟市美術館と新津美術館、この二つの美術館に対して、専門的な見地から、あるいは利用者としての視点から、さまざまなご意見をいただきたい。よろしくお願いします。

新潟市は、新潟港が来年の1月1日で開港150周年を迎えるため、今年から来年にかけてさまざまな記念事業を行う。その皮切りが、日本で最大の海関係のイベントと言われている「海フェスタ」で、7月14日から2週間程度、新潟港を中心にさまざまなイベントを行う予定である。

その7月14日から10月8日まで、開港150周年記念事業の主要事業に位置付けている4回目の「水と土の芸術祭」を開催する。今回は、朱鷺メッセなどがある万代島にこの3月に改修・リニューアルオープンした、旧水揚場跡地、いわゆる「大かま」がメイン会場である。

また、新潟市美術館の近くの旧二葉中学校を改修し、今年の5月にオープンした新潟市芸術創造村・国際青少年センター、通称「ゆいぽーと」に、新潟市としては初めてとなる、アーティスト・イン・レジデンスのスペースを設けた。水と土の芸術祭の関係作家2名を招待し、こちらに滞在しながら作品を作っていただく。芸術祭期間中に作品を公開することも予定しており、できるだけ大勢の方から来ていただきたい。ぜひ、皆さまからもご覧いただくとともに、いろいろな方にPRしていただきたい。

ところで、今年度から新潟市美術館の館長が代わった。今日は、塩田前館長が行った平成29年度の新潟市美術館の事業と、横山館長の新津美術館の事業について、皆さまからご審議をいただきたい。

新潟市美術館の館長も代わり、今年度は、この新しい体制で取り組んでいく。引き続き、皆さまからご指導いただきながら運営していきたい。

2 開会挨拶

(前山館長)

4月から着任した前山です。昨年度はいなかったのですが、勉強をして、美術館がどんなことをやってきたのかを学んでいる最中である。

新しくガラッと変えるということではなく、塩田前館長のときの方向性、具体的には美術館の目指す五つの方針、「発見する美術館」「学べる美術館」「生きている美術館」「つながる美術館」「信頼の美術館」を着実に踏まえながら、美術館ができるだけ市民の方々に愛され、くつろげる美術館にしていきたい。ご審議のほどよろしくお願いします。

3 出席者紹介

出席委員が自己紹介。

事務局職員が自己紹介。

4 議事

(1) 会長及び副会長の選任

(各委員から特に意見等がなかったため) 会長に中山輝也委員、副会長に佐藤靖子委員をとの提案が事務局からなされ、全会一致で承認された。

(中山会長)

この協議会は、新潟市美術館と新津美術館の運営をさらによりよいものとするため設置され、今期で第4期になる。今後ともできる限りのご協力を賜りたい。

私の所感だが、昨今の経済情勢の中で、私立の小さな美術館が本当に大変な状況であることについては言うまでもないが、むしろ、公共性の高い自治体の美術館・博物館でも予算不足等で厳しい運営を余儀なくされていると思っている。

例えば、県立自然科学館は20年ぐらい展示替えをしていない部分があると言われている。また、公設の美術館では、その地域の素晴らしい作品があっても購入できないという状況が長く続いている。現場では魅力ある企画に知恵を絞っているが、この状況が続くと大変な事態になる。地域に根差した展示がなくなると、市民が地域の芸術文化と触れ合う機会がなくなる。学芸員の研究の機会も当然減少していくことも懸念される。

両館には、文化の継承、そして、芸術と市民をつなぐ役割があり、行政として、ある程度の予算と人員の確保が必要ではないかと思う。この会議では、皆さま方から忌憚のないご提案、ご意見を賜りたい。

(佐藤副会長)

今までは市民目線で美術館を楽しんでいたが、両館のいろいろな課題に対する努力に、私どもも協力していかねばという気持ちでいる。今回は、水と土の芸術祭や開港150周年の記念事業が始まるので、わくわく感を持ちながら、また、素晴らしい美術館経営のために私たちも努力して、様々な意見を出し合いながら協力して参りたいと思う。どうぞよろしくお願い致します。

(2) 新潟市美術館及び新津美術館平成29年度事業報告

資料1、資料2及びパワーポイントの画像に沿って、新潟市美術館の平成29年度の事業

報告について事務局より説明。

資料3、資料4及びパワーポイントの画像に沿って、新津美術館の平成29年度の事業報告について事務局より説明。

(建島委員)

パワーポイントに、展覧会の会場で子どもたちを床に座らせて講師が話している写真があったが、一般公開の時間中にやったものか、時間帯を別に設定したのか。

(荒井学芸係長)

原則として、一般公開の時間帯で行っている。ただし、受付に「本日は団体観覧がある」という掲示を出して、来館者の方にご理解いただくようにしている。

(建島委員)

実際に埼玉県立近代美術館でもあったが、子どもたちの観覧と一緒にすると、受付にうるさいというクレームがくる。もちろん静かなところでゆっくり見たいという気持ちはわかる。ただ、海外の美術館ではしょっちゅうギャラリーガイドのツアーが来ていて、それに対して何の抵抗感もなく受け入れられている。僕は、子どもたちの観覧は開館時間内に堂々とやってもいいと思っている。社会全体で「マナー」という名前の不寛容なモラルみたいなものが蔓延しているのがすごく嫌である。美術館はもうちょっと鷹揚であっていいと思う。もちろん、大声の話し声が気になるのも分かるし、看視の人が注意してもいいが、子どもたちの観覧で子どもたちから意見を聞くとか、ギャラリーガイドツアーで説明するときとかは、あまり気にせずやるべきだと思っている。だから、一般公開の時間にやっていると聞き、少し安心した。

それから、新津美術館のホームページのアクセス数が伸びていると説明があったが、今、若い人たちの情報源はSNSである。長い情報や図版を紹介するのにホームページは大事だが、ただ、ホームページのアクセス数が減っても、SNSでカバーされるのではないか。ホームページのアクセス数は、今まではかなり絶対的な指標だったが、SNS対応をしていればそんなに気にしなくてもいいのではないか。

(横山館長)

会場内の話し声については新津美術館でもかなりクレームがきていたが、このごろはクレームの数もかなり減った。「こどもタイム」というお話ししてもよい時間を設けてあり、お客さまに周知したことで、クレームもだいぶ減ったのではないかと思う。入館者が多くなればなるほど、静かな状態ではなくなるので、そこは、お客さまにご理解いただくしかないと思う。

ホームページについては、昨年度の協議会でもSNSを使ったらどうかというご意見があ

り、新津美術館でもようやくこの6月からSNSを導入して、取り掛かったところである。

(島委員)

資料収集予算は、県立・市立の美術館ではゼロベースが多いが、ここではゼロの時代はなかったのか。持続的に資料収集してきたのか。

(松沢課長補佐)

昨年度までは両館合わせて2,000万円の予算があったが、新潟市の財政難という事情により、今年度はその予算がなく、購入はできない。

(島委員)

残念である。資料にあった吉原悠博さんは1980年代から90年代初めにかけてとても活躍され、その後こちらで写真館をしながら独自に活躍をされていて、とてもいいと思った。購入した吉原さんの作品はどういうものか。

(荒井学芸係長)

2017年の文化庁メディア芸術祭で受賞した《培養都市》という作品で、水と土の芸術祭2015に出した映像作品である。東日本大震災を機に、東京から新潟の柏崎刈羽原発まで高圧送電線を遡っていく、18分ほどの映像作品で、次回のコレクション展Ⅱで出品する予定である。

(島委員)

阿部展也さんの作品は、今回の展覧会に全て生かされているのか。

(松沢課長補佐)

はい。

(島委員)

先ほど建島委員からお話のあった子どもの声について、21世紀美術館は四六時中うるさい美術館で、それが嫌な人は石川県立美術館のほうへ行く。ここの美術館は、もうちょっとにぎやかでもいいのではと思う。

(金山委員)

コレクションの購入予算について、今年はゼロということか。基金はありますよね。

(松沢課長補佐)

3億円の基金はあるが、現金として入っている分は少なく、基金の枠の中で保有している作品を少しずつ一般会計で買い戻しをするよう、市の執行部から指示を受けていた。先ほどは少し説明が足りなかったが、これまでの2,000万円の予算を新規購入に満額使えるというわけではなく、その2,000万円の中で基金からの作品買い戻しと新規の購入を進めていた。

(金山委員)

先ほど阿部展也の展覧会を見たが、新潟市美術館のコレクションとして、非常に目玉だと思う。いい作品は待っているとどこかへ行ってしまいが、そういういい作品が出たとき、予算がゼロだとすぐ手を打つことができない。基金を使って購入することは可能か。

(松沢課長補佐)

まだ、基金の中身が十分に現金化できていない状態なので、現金化の進み具合と、どういう作品がチャンスとして来るかという辺りも見ながら、適宜話し合いをして、ということになると思う。

(金山委員)

ぜひ、いい作品があれば購入できるような態勢は取ってもらいたいと思う。

新津美術館の松本零士の展覧会を契機に、鉄道資料館とコラボしたり、商店街ともうまく連携ができていた。鉄道資料館の委員もやっているのだから、以前からうまくコラボができるといいねと言っていたが、それが実現して本当によかった。引き続き、美術館と資料館のコラボや、テーマを共有してやってもらいたい。

また、興福寺展について、スライドでアートの作品は紹介されていたが、興福寺の寺宝は指定物件を借りてきたのか。文化財の公開承認施設との関係はどうなっているか。

(横山館長)

国宝と重要文化財を借りた。公開承認施設にはなっていないので、「一件案件」として文化庁の承認を受けて借りた。

(金山委員)

今、文化財保護法の改正の絡みもあり、公開承認施設のことがいろいろテーマになっているが、今後、そういう承認を受ける予定や計画はあるのか。

(横山館長)

一応、文化庁のほうでは、国宝・重文等を公開するという方針では来ているが、やはりまだハードルは高い。

5年間に3回、国宝・重文を展示しないと承認施設の申請ができないというハードルはある。今のところ、国宝、重文をこれからどれだけ借りられるかがはっきりしないため、そこまでは考えていない。

(金山委員)

最後にもう一つ。学校の子どもたちがバスに乗って市内の文化施設を回るという、とてもいい制度があるが、新潟市の今年度の予算がかなり減額されたと聞いている。そのため、子どもの入館者数は随分減らざるを得ない状況だと思うが、美術館でもそういう影響はあるか。

(荒井学芸係長)

確かに、小学生の音楽鑑賞の授業で、バスで市民芸術文化会館に聴きに行く事業がなくなったということは聞いている。当館のARTTRIP事業も予算の縮小で、昨年度は8校募集していたところを、今年度は6校程度に絞ったが、非常に評判のいい事業でもあり、何とかやれる限りはということで、今後はかたちも検討をしていかなければと考えている。

(金山委員)

いろいろな市の財政事情もあると思うが、やはり美術館は教育機関であるから、教育活動としてその辺の態勢は担保していただきたいし、予算要求の中でも、今後復活していくかたちでお願いしたい。

(今井委員)

新津美術館の移動美術館の開館日数が、17日と大変少ないが、もう少し増やしたらいいか。入館者が少ないと思う。

(横山館長)

江南区郷土資料館にお願いして、日程を空けてもらってお借りしている。今年度は昨年度並みでやるが、次年度からは、少し期間を延ばせるようであれば、延ばしていけるよう協議したい。

(今井委員)

あと、もう一点。こちらの美術館へ来る新潟交通のバスがだんだん少なくなり、2、3年前に全部なくなった。私たちのように免許を持たない者は、バスに乗る代表として困る。

(中山会長)

それはやはり新潟交通の問題でもあり、新潟交通にお願いしていくしかないと思う。バスが美術館の前まで来れば一番いいが、東京でも乗り物から下りて美術館まで行くには相当歩く。古町からここまで歩くのは大した距離ではない。それについては、美術館から新潟交通に改めて申し入れてもらってはどうか。

(今井委員)

西堀通からバスを引き込んでくるとか、そういうことも考えられるのではないかと思う。

(中山会長)

ここへ直接というのはなかなか難しいとは思いますが、その申し入れはやってもらってはいいか。

(高橋副館長)

私から、市の担当課のほうにご意見を伝えます。

(今井委員)

今日は新潟駅から西堀経由で乗ってきて、イタリア軒の脇から歩いてきた。新潟市美術館

行きのバスを復活させてほしい。乗る人が少ないからバスがなくなったのだろうが、私より年齢が上の人たちから、困るという意見がたくさんある。

(高橋副館長)

わかりました。そのような話も担当のほうに伝えます。

(中山会長)

よろしく願います。

(佐藤副会長)

感想を3点。まず、ART R I Pと出前美術館は私の勤めていた学校でも利用していた。特にART R I Pは、学芸員に学校に来てもらい、事前に鑑賞の仕方と、美術館はこういうふうに臨めばいいんだという心構えをしっかりと指導していただくので、素晴らしい取り組みだと思う。8校から6校になったのが非常に残念だが、ぜひ、中学校も少し増やしてもらいたい。また、出前美術館は、本物の芸術家から指導いただく機会は素晴らしいので、これもぜひ継続してもらいたい。子どもたちは初めて美術館に来たということで生き生きと、そして、静かに鑑賞していることは、リーフレットの写真の雰囲気を見ればわかる。事前に指導すれば子どもたちも作品と対話しながら鑑賞することを学んでいくと思う。

それから、SNSについて。2月に金沢 21 世紀美術館に行った時、女子大生がたくさん来場されていて、プールの周りでキャッキヤ言いながら「これ、インスタ映えするよね」等々言っていた。今は若い方々が様々なところで発信していく時代である。「What's Ni i G A T A」というオレンジ色のモニュメントが、信濃川沿いと駅南とに二つあり、小林まことさんのファンの方が「あ、ここにマイケルがいる」と言って、一生懸命写真を撮っていた。美術館の中にもインスタ映えするコーナーがあってもいいと思う。

また、これは別件だが、佐渡が世界遺産登録を目指して頑張っているが、佐渡のガイドブックで、とても若者ウケするような、かわいらしいカフェや巡り方を紹介する小さいガイドブックが安く売られている。同じように、美術館同士が連携して、特に距離感がわからない県外の方にこんなふうに巡るといいよ、ここだとおいしいものがある、こんなふうに見るといいよと紹介する500円ぐらいの冊子があれば、若者も買うと思う。そのような薄い冊子が1年に1回ぐらい出ると、目に留まると思う。

3年前、大地の芸術祭が、三つか四つぐらい婦人雑誌にも載っていて、美術館の巡り方とか、アートの楽しみ方が結構掲載されていたので、そういうところに目が留まると、さらに全国から来場者が増えると思う。

最後になるが、昨日たまたまテレビを見ていたら、横澤夏子さんが新潟市美術館のカフェに来ていた。そのような取り組みをどんどん発信していただきたい。水島新司さんのドカベ

ンが最終号になり、これに関してマスコミでは新潟についての特集やインタビューが多く報道されていた。水島事務所がなかなか難しいというのはわかるが、ここで新潟マンガ王国の象徴でもあるドカベンイベントを検討していただけたらと思う。

(茂木委員)

今回会議に出席して、いろいろな取り組みをしていることにとても感動した。いろいろな企画展がある中でも、ワークショップや学芸員のトークセッションなどをやっていて、素晴らしいと思った。

新津美術館の資料には職業体験で来た学校が書いてあったが、新潟市美術館は何校ぐらい受け入れているのかを聞きたい。

また、今の佐藤委員のお話のように、SNSでインスタ映えするところを広げていくと若者が来て、その若者から発信が広がれば、何十人、何百人、何千人という方が来るようになり、バスも来るのではないかと思うので、インスタ映えを目指したのがあるといいと思う。

(荒井学芸係長)

新潟市美術館の職場体験などの受入れについては、今年度から新潟市美術館の年報に掲載することにした。38 ページの中ほどの「② 職場体験・職場訪問など」で、昨年度は9校58名を受け入れた。「職場体験」だけだと、新潟小学校の一日店員体験も含めて4校受け入れた。

(田宮委員)

2点質問したい。自己紹介で、学生のころ美術教育について学んだと話したが、私が勉強していたころは、学習指導要領が変更する前後で、美術の授業の時間があまり重要視されておらず、減少するだろうと言われていたような気がする。今日の報告を聞くと、小学校から中学校、高校まで、活発に鑑賞をしているように思えた。職業体験にも何校も来ているということで、私の習ったときとだいぶ変わっているなという気がした。教育機関が全体的に、美術の世界と子どもたちをつなげようという動きが活発になっているのか、それとも、学校単位で、すごく頻繁に関わる学校があれば、全然関わりがない学校があるのかというのを聞きたい。

2点目は、先ほど、にぎやかな美術館の鑑賞というお話があったが、私はどちらかというところと静かな中で見ていたいタイプである。世界的に見れば美術館はすごく開かれた場所で、にぎやかな鑑賞が一般的だということも知識としてはあるが、今後、新潟市美術館や新津美術館は、もっとにぎやかな鑑賞を推奨していくような動きになっていくのか。

(松沢課長補佐)

新潟市美術館での学校との連携について、少し前からの経緯も含めて話をしたい。学習指導要領の変更に影響を受けるというのは、確かにある。かつては学校が予算を潤沢に持っていた時期があり、たくさんの方が貸切バスを使って美術館を訪ねてくるのが結構あった。それが、だんだんと少なくなり、今から 10 年ほど前、待ってはいけないということで、美術館で送迎バスの予算を確保して、美術館で鑑賞の授業をやってもらうオープンギャラリーを 2008 年ぐらいから始めた。その後、反省や検証を行って、今のARTTRIPというかたちに進化させてきた。

学校と美術館ないしは博物館の連携については、学習指導要領の改訂が 2008 年に行われた中で、学校が積極的に博物館や美術館を活用するようという、そういう政策的な方針も盛り込まれていたと承知しており、それも踏まえ、新潟市の美術館として学校とどう連携していくのかということで、出前美術館、ARTTRIP、その他教育普及関係のプログラムについて校長会の開催時に説明に出向くなど、こちらから働きかけを行っている。

(横山館長)

「博学連携」という言葉があり、博物館と学校が連携して授業をやるということだが、文部科学省のほうで、学校と博物館との連携を強めるようという方針である。方法論や予算がどうなるかはこれからの話だが、これから学校と博物館施設の連携が強まると言われている。

開かれた美術館については、子どもたちには小さいときから美術館に足を運んでもらい、「静かに見るとき」と「にぎやかに見ていいとき」を、美術館の中で学んでもらうことが必要になってくると考えている。

(降旗委員)

学校と美術館の関係については、目黒美術館でもずっと取り組んできたが、最近問題なのは、学校の授業がかなり厳しくなってきた、以前は時間のやりくりができたのが、今はなかなかできなくなってしまい、ギャラリートーク・ツアーで来る学校が減っていて、深刻な状態になっている。文部科学省や文化庁の指導は、もっと積極的に美術館をとということになっているようだが、この先どういうふうになるのか…というのは感じている。

しかし、ワークショップについては私どももかなり一生懸命やってきたので、そこで育った子どもたちが、前も話したが、今は逆にその子たちが講師になって教えていて、次の世代を育てているので、それは、長くやってきた成果だと言えると思う。

今日は、いろいろと報告を聞き、両館とも、今までの経緯の中で、すごく展開がうまく、いいかたちで行われていると感じた。

新潟市美術館は、それぞれの学芸員の個性もすごくよく出ていて、現代美術や、古いところの展覧会、人がたくさん入る展覧会と、緩急をつけていいかたちができていると思う。新

津美術館も、アニメや写真などが面白い美術館だねと言う方も随分増えてきていると感じた。

教育普及で、できれば5年とか少し長いスパンで、シリーズで展開できる、子どもと大人も含めたかたちでの活動を考えるといいと思う。シリーズ化することで、子どもたちが育ってくるし、それが一つのテーマになるのではないかな。

それから、一日のワークショップや講座が多いので、大変かもしれないが日数を少し増やすとか、時間をもう少しかけて、徐々に子どもたちが心を開いて創作に当たれるようにすると、ここで育った子どもたちが成長して、ここを支えてくれる宝になるのではないかなと思う。
(横山館長)

今の降旗委員のお話は、前から何度かお聞きしている。そういうかたちでできるといいと思っている。文科省からは指導が出て、予算はなく、学校の授業のコマ数も減っている中で、子どもたちとどういうふうに接していくかということが、博物館・美術館側に投げかけられていると考えている。

新津美術館の出前美術館は、そこを考慮し、学校側の負担をいかに減らせるかということで、作家の人を連れていき、学校は移動の時間を取らなくて済むという発想から出てきたものであるが、これも予算の問題で、なかなかできにくくなっている。

おっしゃるように、美術館でも講座や日数を増やしていくことが、これから求められると思う。

(東村委員)

まずは、ミュージアムショップ、カフェの充実というのが新潟市美術館の平成29年度の実施概要に書かれている。私も会議の前に、「こかげカフェ」で腹ごしらえしてから来た。ミュージアムショップ「ルルル」もいつもいろいろな企画をやっており、すてきな商品がたくさんあって良い。

そのショップの売上げや契約の状況はどうなっているか。連携しているのはよくわかるが、実際に売上げが伸びているとか、新潟市美術館にもお金が多少入っているとか、その辺を知りたい。今日も、非常に若いお客がいて、このまま企画展に入ってくれたらいいのと思うのだが、そのまま西大畑公園へ行ってしまった。ショップのお客をどう取り込んでいけばよいか考えながら食べた。

それから、『Wave』はどこで手に入るのか、どんなふうに配布しているのか。

両館に対しての感想だが、本当に少ない職員数と限られた時間の中で、学芸員の皆さんが本当に大活躍していることに頭が下がる思いである。私がフリーで出演しているラジオにも学芸員さんに出演してもらい、言葉でも伝えてもらい、感謝している。

アートリンクで県立美術館とのコラボレーションを始めたという報告もあったが、非常に

いいことだと思った。一緒にトークセッションのイベントをやることで刺激を受けたのではないと思う。

学芸員の奥村さんと荒井さんの2人は、町へ出て、いろいろなところで町の人たちと触れ合っていると聞いている。歩いて地域を知るということを、ぜひこれからも進めてもらいたい。特に奥村さんは、金山委員の発言にあった鉄道資料館や商店街とのコラボも、奥村さんのそれがあったから実現したのだろうと思う。非常に素晴らしいことである。

あと、新津美術館がSNSを始めたということで、今、大急ぎでフェイスブックを見て「いいね」をした。展覧会のチラシにも「フェイスブック始めました」と載せるなど、PRも大事になる。

秋葉区は、子育ての環境が非常によく、若いママさんたちが移住、定住してきている。子育て中のママさんたちに気兼ねなく美術館に足を運んでもらえるような、静かなほうがいいという方もいれば、にぎやかでもいいという方、そういういろいろな人が足を運べる館づくりをしてもらいたい。「子どもを抱っこしていくのはちょっと」というママさんに、「音楽を流して、子どもたちがにぎやかになってもいい時間帯もある」というと、「ああ、そうなんだ」といわれる。ぜひ、ママさんたちの声にも耳を傾けてもらいたい。

最後に一点。昨年、パリに生きる新潟の作家たち展で、コンサートを秋葉区文化会館でやったが、美術館だけではなく、鉄道資料館などほかのところとのコラボレーション、横に手をつないでいく活動を、大変だろうがぜひ進めてもらいたいと思う。

(高橋総務係長)

ショップ、カフェとは、場所の貸付けの契約と、図録や絵はがきなど美術館が作ったグッズの販売委託契約をしている。毎月の売上げについて報告をもらう契約内容になっていないため、実際、どのくらい売上げがあるかということは、こちらでは把握はしていない。ただ、ショップ、カフェの方々と、月1回閉館後に会議をしており、そこでいろいろな情報交換はしている。

(東村委員)

手応えはあると言っているか。

(高橋総務係長)

展覧会によって、グッズの売上げがすごく好調なときと、そうでもないときがあるとか、このフェアはとても好評だったなどの情報はもらっている。

(前山館長)

前任の埼玉県立近代美術館で、ミュージアムショップの立ち上げからずっと関わっていたので、ここに来てもできるだけショップをのぞいて、仕入れ先や人をいつでも紹介すると言っている。

やはりミュージアムショップというのは、美術館の中のショップで止まっていたはいけない。あそこに行けばいいものが買えるとか、何かのプレゼントならあのショップに買いに行こうというところまで持っていかないと駄目である。今でも十分いいショップだが、口は出していきたい。

(東村委員)

私も県外出身なので、新潟県の物を買うときはここに来ようと思っている。

(荒井学芸係長)

美術館だより『Wave』は、2015年からフリーペーパーのような体裁にして、間もなく発行の2018年度版まで4本はこの体裁で出した。体裁を変えた際は、美少女図鑑を作っている新潟のデザイン会社のテクスファームさんと一緒に誌面作りをした。それまでは、A4サイズの役所っぽい美術館だよりだったが、より皆さんに親しんでもらいたいということをお願いした経緯がある。7,000部しか作っていないが、当館で、市の機関や全国の主要な美術館に配布するほか、テクスファームさんに、若者の出入りしそうなお店、美容院、といったところへの配布をお願いした。これも、予算の関係で少し見直すことになっているが、周知に努めていきたい。

(中山会長)

新津美術館については、意見ということでよろしいか。

(東村委員)

頑張ってください。エールです。

(田中委員)

まず、コレクション展についての感想である。今日も、新潟市美術館のコレクション展を観てから来た。切り口がいつもすごく面白いと思って見ている。所蔵する作品をただ展示するのではなく、特に最近企画展とのテーマの関連性も意識しつつ、いろんな現代作品にアプローチしやすいような視点を定めている。ぜひこうした工夫を続けてもらいたい。

新津美術館は、もともと所蔵が目的ではなかったと思うが、少ない所蔵品で毎回コレクション展を開催している努力は素晴らしいと思う。欲を言えば、もう少し広いスペースで充実したコレクション展も見たいという気はする。

もう一つ、感想だが、昨年度にアートルックで4館の学芸員のトークがあったが、そういう活動は、美術館の活動がどういうものか、美術館の使命はどういうものかということを市民に知らせることができる、非常に貴重な機会だと思う。先ほど、静かに鑑賞することについて、いろいろな意見が出たが、それについて、市民が問題意識を持つのも、そのような活動を通して可能になると思うので、作品展示だけではなく、美術館の使命の教育普及もぜひ

続けてもらいたい。

新潟市美術館の作品修復について質問する。作品の修復過程の一部公開は、どんなかたちで実現したか。

もう一つは、新津美術館の移動美術館について、いつも同じ会場で行っているのか、移動先を増やすことを考えているのか、それに当たっての問題点などを聞きたい。

(荒井学芸係長)

修復については、一昨年度に市民ギャラリーで、修復家の方をお願いして5日間かけて行い、『Wave (27号)』でも紹介した。最初のほうはデリケートな作業なので、最後の仕上げ段階で、見てもらっても安全という状態になってから、2日間、市民ギャラリーで修復家の立ち会いのもとで公開した。

(横山館長)

移動美術館は、新津美術館の学芸員の数を考えると、現状維持がやっとなのである。増やしたいと思うが、会場の問題もあるので、これからの検討である。

(中山会長)

本日の話は、開かれた美術館ということが主題だったと思う。開かれた美術館ということは、やはり市民とのコラボ、そして、美術館鑑賞予備群を育てていくということが重要と考える。そのため、学校との連携もこれから広がっていくのではないかと思う。

また、予算という問題もあった。先ほど課長補佐から説明があったように、お金がほとんど増えていない、むしろ減少傾向にあったことを改めて理解できた。そのため、これから相応の工夫が必要である。こうした文化的なものがなくなると国も衰退するということを念頭に、関わっていく必要があるのではないだろうか。

本日は、皆さんから忌憚ない意見をたくさんいただき、感謝申し上げます。これらのご意見を生かして、更に、より良い館の運営ができるよう皆で努力していけたらと願うものである。

5 閉会挨拶

(横山館長)

委員の先生方からご指摘、ご意見いただいたことを、両館とも今後の運営に反映させていきたい。新潟市の財政難について話の中にたびたび出てきたが、その中でも、両館とも市民目線を失わずに運営していきたいと思っている。本日は、長時間にわたり熱心なご審議をありがとうございました。